三国志（二）

吉川英治全集

第27巻

編纂委員

川口松太郎
川端　康成
小泉　信三
小林　秀雄
佐佐木茂索
獅子　文六

講談社版

吉川英治全集・27　三国志（二）

著　者　吉川英治
装幀者　杉本健吉
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話東京九四二局一一一一（大代表）
振替東京三九三〇
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社若林製本工場
本文用紙　日本パルプ工業株式会社特漉
第一刷　昭和四十一年九月二十日　第六刷　昭和四十一年十月三十日
定価　六百八十円
© 一九六六年　吉川英治

目次

臣道の巻（つづき）　三
孔明の巻　一〇一
赤壁の巻　二六九
望蜀の巻　四三七

三国志

（二）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

臣道の巻（つづき）

丞相旗

一

その頃、北海（山東省・青州）の太守孔融は、将軍に任命されて、都に逗留していたが、河北の大軍が、黎陽まで進出してきたと聞いて、すぐさま相府に馳けつけ、曹操に謁して、こう直言した。

『袁紹とは決して軽々しく戦えません。多少は彼の条件を容れても、ここはじっと御自重あって対策を他日に期して和睦をお求めあることが万全であろうと考えられますが』

『貴公もそう思うか』

『勢の旺なるものへ、敢て当って砕けるのは愚の骨頂です』

『旺勢は避けて、弱体を衝く。――当然な兵法だな。――だがまた、装備を誇る驕慢な大軍は、軽捷な寡兵をもって奇襲するに絶好な好餌でもあるが？』

曹操はそうつぶやいて、是とも非とも答えずにいたが、再び口を開いて、

『ともあれ、諸人の意見に問おう。きょうの軍議には、御身もぜひ列席してくれい』と、云った。

その日の評議にのぞんで、曹操は満堂の諸将にむかい、

『和睦か、将た、決戦か』

の忌憚なき意見をもとめた。

荀彧が、まず云った。

『袁紹は、名門の族で、旧勢力の代表者です。時代の進運をよろこばず、旧時代の夢を固持している輩のみが、彼を支持して、時運の逆行に焦心って居るのであります。かくの如き無用な閥族の代表者は、よろしく一戦の下に、打ち破るべきでありましょう』

孔融は、彼の言が終るのを待って、

『否！』と、起ち上った。

『河北は、沃土ひろく、民性は勤勉です。見かけ以上、国の内容は強力と思わねばなりますまい。のみならず、袁紹一族には、富資精英の子弟も多く、麾下には審配、逢紀などのよく兵を用うるあり、田豊、許収の智謀、顔良、文醜等の勇など、当るべからざる概があります。また沮授、郭図、高覧、張郃、于瓊などという家臣も、みな天下に知られた名士である。どうして、彼の陣容を軽々と評価されようか』

荀彧は、にやにや笑って聞いていたが、孔融の演舌がすむと、やおら答えて、

『足下は、一を知って二を知りたまわず、敵を軽んずるのと、敵の虚を知るのとは、わけがちがう。抑〻袁紹は国土にめぐまれて富強第一といわれているが、国主たる彼自身は、旧弊型の人物で、事大主義で、新人や新思想を容れる雅量はなく、故に、国内の法は決して統治されていない。その臣下にしても、田豊は剛毅ではあるが、上を犯す癖あり、審配はいたずらに強がるのみで遠計なく、逢紀は、人を知って機を逸す類の人物だし、そのほか顔良、文醜などに至っては、匹夫の勇にすぎず、ただ一戦にして生捕ることも易かろう。――なお、見のがし難いことは、それ等の碌々たる小人輩が、たがいに権を争い、寵を妬みあって、ひたすら功を急いでいることである。――十万の大軍、何するものぞ。彼より来るこそ、お味方の幸である。いま一挙に、それを討たないで、和議など求めて行ったら、いよいよ彼等の驕慢をつのらせ、悔を百年にのこすであろう』

両者の説を黙然と聞いていた曹操は、しずかに口を開いて、断を下した。

『予は戦うであろう！　議事は終りとする。はや出陣の準備につけ！』

その夜の許都は、真っ赤だった。

前後両営の官軍二十万、馬はいななき、鉄甲は鏘々と鳴り、夜が明けてもなお陸続と絶えぬ兵馬が黎陽をさしてたって行った。

二

曹操はもちろんその大軍を自身統率して、黎陽へ出陣すべく、早朝に武装のまま参内して、宮門からすぐ馬に乗ったが、その際、部下の劉岱、王忠のふたりに、五万の兵を分け与えて、

『其方どもは、徐州へ向って、劉玄徳にあたれ』と、命じた。

そして自分のうしろに捧げている旗手の手から、丞相旗を取って、

『これを中軍に捧げ、徐州へはこの曹操が向っておるように敵へ見せかけて戦うがよい』

と策を授け、またその旗をもふたりへ預けた。

勇躍して、ふたりの将は、徐州へ向ったが、後で、程昱がすぐ諫めた。

『玄徳の相手として、劉岱、王忠のふたりでは、智力ともに不足です。誰かしかるべき大将をもう一名、後から参加させてはどうですか』

すると曹操は、聞くまでもないことと頷いて、

『その不足はよく分っておる。だからわが丞相旗を与えて、予自身が打ち向ったように見せかけて戦えと教えたのだ。玄徳は、予の実力をよく弁えておる。曹操自身が来たと思えば、決して、陣を按じて進んで来まい。そのあいだに、予は袁紹の兵をやぶり、黎陽から勝に乗って徐州へ迂回し、手ずから玄徳の襟がみをつかんで都への土産として凱旋するつもりだ』と、豪笑した。

『なるほど、それも……』と、程昱は二言もなく彼の智謀に伏した。

こんどの決戦は、黎陽の方こそ重点である。黎陽さえ潰滅すれば、徐州は従って掌のうちにある。

それを、徐州へ重点をおいて、良い大将や兵力を向ければ、敵は、徐州へ多くの援護を送るにちがいない。

そうなると、徐州も落ちず、黎陽もやぶれずという二兎両逸の愚戦に終らないかぎりもない。

『丞相に対しては、めったに献言はできない。自分の浅慮を語るようなものだ』

程昱はひとり戒めた。

黎陽（山西省・黎城）――そこの対陣は思いのほか長期になった。

敵の袁紹と、八十余里を隔てたまま、互いに守るのみで、八月から十月までどっちからも積極的に出なかった。

『はて、なぜだろう？』

万一、彼に大規模な計略でもあるのではないかと、曹操もうごかず、ひそかに細作を放って、内情をさぐってみると、そうでもない実情がわかった。

敵の一大将、逢紀はここへ来てから病んでいた。そのため審配がもっぱら司令にあたっていたが、日頃からその審配と不和な沮授は、事毎に彼の命を用いないらしいのである。

『ははあ、それで袁紹も、持まえの優柔不断を発揮して、ここまで出て来ながら戦いを挑まないのであったか。この分ではいずれ内変が起るやも知れん』

彼は、そう見通しをつけたので、一軍をひいて、許都へ帰ってしまった。

――と云っても、もちろん後には、臧覇、李典、于禁などの諸大将もあらかた留め、曹仁を総大将として、青州徐州の境から官渡の難所にいたるまでの尨大な陣地戦は、そのまま一兵の手も弛めはしなかった。ただ機を見るに敏な彼は、

『予自身、ここにいても、大した益はない』

と戦の見こしをつけた結果である。それと、徐州のほうの戦況も気にかかっていたにはちがいない。

鬮

一

許都に帰ると、曹操はさっそく府にあらわれて、諸官の部員から徐州の戦況を聞きとった。

一名の部員は云う。

『戦況は八月以来、なんの変化もないようであります。すなわち丞相のお旨にしたがい、発向の折、親しく賜わった丞相旗

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

をうちたて、曹丞相みずから征してこの軍にありと敵に見せかけ、徐州を隔つこと百里の前に陣をとりて、敢て、軽々しく動くことを誡め、まだ一回の攻撃もしておりません』

曹操はそう聞くと、いかにも呆れ返ったように、

『さてさて鈍物という者は仕方がないものだ。機に応じ変に臨んで処することを知らん。下手に戦うなと云えば、十年でも動かずにいる気であろうか。曹操自身、軍にあるものなら、百里も敵と隔てたまま、八月以来の長日月を、無為にすごしているわけはないと、かえって敵が怪しむであろう』

彼は、歯がゆく思ったか、急に軍使を派して、

『すみやかに徐州へ攻めかかって、敵の虚実を計れ』と、厳しく催促した。

日ならずして曹操の軍使は、徐州攻略軍の陣中に着いた。寄手の二大将、劉岱、王忠のふたりは、

『何事のお使にや？』と、鞠躬如として出迎えた。

軍使は、曹操の指令をつたえ、

『丞相のおことばには、其許たちへは、生きた兵をあずけてあるに、何故、藁人形の如き真似しておるかと、きつい御不興である。一刻も御猶予はあるべからず』と、有りの儘を伝えた。

劉岱は、聞くと、その場で、

『いかさま、長い月日、ただ丞相の大旗をたてて、こうして居るのも余り無策と思おう。王忠殿、足下まず一押して、敵がどう変じて来るか、一戦試みられい』と、云った。

王忠は、首を横に振って、

『こは意外な仰せではある。都を出る時、曹丞相には、親しく貴公へ向って、策をさずけ賜うたのではないか。貴公こそ先に戦って、敵の実力を計るべきだのに』

『いやいや、自分は寄手の総大将という重任をうけたまわっておる者、豈、軽々しく陣頭にすすみ得ようか。――其許まず先鋒に立ちたまえ』

『異なおことば哉。御辺と、それがしとは、官爵の高下もないに、何で、それがしを下風に視られるか』

『いや、何も、下風に見くだすわけではないが』

『今の口吻はこの王忠を、部下といわないばかりではないか』

ふたりが争い出したので軍使は眉をひそめながら、

『まあ待ちたまえ。まだ一戦もせぬうちに、味方のなかで確執を起すなど是非によらず、どちらも醜しと人に云われよう。――それよりは拙者がいま、鬮を作るから、鬮を引いて、先鋒と後詰の任をきめられては如何か』

『なるほど、それも一案』と、王忠も劉岱と同意したので、異存なくばと、念を押したうえ、軍使は二本の鬮をこしらえて二人に引かせた。

劉岱の鬮には、

後

と、書いてあった。

王忠が『先』を引いたのである。そこで嫌応なく、王忠は一軍を率いて、徐州城へ攻めかかった。

玄徳は徐州城の内にあって、かくと知ると、すぐ防禦を見ま

わった上、陳登に対策をたずねた。
陳登はその前から、寄手の丞相旗には不審を抱いていた。必定、これは曹操の詭計であろうと、看破していたので、
『まず一当り当ってみれば、敵の実力がわかります。策はその上でいいでしょう』と、答えた。
『然り、それがしが参って、彼の虚勢か実体かを試み申さん』
と、列座の中から進み出た者がある。その大声だけでもすぐそれとわかる張飛であった。

二

張飛が進んで、城外の敵に当らんと望んで出ると、玄徳は、むしろ歓ばない色を顔に示して、
『いつもながら躁がしき男ではある。待て、待て』
と押し止め、行けとも、行ってはならんとも云わなかった。
『それがしの武勇では、危いと仰せられるので御座るか』
張飛が不平を洩らすと、
『いや、汝の性質は、至って軽忽で、躁がしいばかりであって、その為事を仕損じ易いから、わしはその点を危惧しているのだ』と、玄徳は飾らず云った。
張飛は、なお面膨らせて、
『もし、曹操に出会ったら、木ッ葉みじんに敗れて帰るだろうと、それを心配なさるので御座ろう。笑止笑止。曹操が出て来たら、むしろ勿怪の幸、引ッ摑んで、これへ持ち来るまでのこと』
『だまれ、それだからそちは躁がしい男というのだ。曹操は、その心底には、漢室にとって、怖るべき逆意を抱いているが、名分の上では、常に勅令を号することを忘れて居らぬ。——故に、今われ彼に敵対すれば、曹操は得たりとして、われを朝敵と呼ぶであろう』
『この期になっても、まだそんな名分にくよくよして居られるのですか。では、彼が攻め襲せて来ても手を拱いて、自滅を待っているつもりですか』
『袁紹の救いが来れば、何とかこの危機も打開できようが、それもあてにはならないし、曹操からも敵視されては、早、死するに門なからん……である。まったく玄徳の浮沈は今に迫っておる』
『はてさて、弱気なおことば、将たる者が御自身味方の気を減したもう事やある』
『彼を知り、己を知るは、将たる者の備え、決して、いたずらに憂いているのではない。いま城中にある兵糧は、よく幾月を支え得ようか。またその兵糧を喰う大部分の軍兵は、元来、曹操から預って来た者共で、みな許都へ帰りたがっておるであろう。かかる弱体をもって、曹操に当らんなど、思いもよらぬことである。ただ千に一つの恃みは、袁紹の来援であるが、これとても……』
彼の正直な嘆息に、帷幕の人々も何となく意気昂らない態だった。——余りに正直すぎる大将という者も困りものだ。こんな気の弱い御主君は他にあるまい——と張飛も奥歯を咬みなが

ら黙ってしまう。

——と。次に、関羽が前へ出て云った。

『御深慮は尤もです。けれど、坐して滅亡を待つべきでもありますまい。それがし城外へ罷り向って、およそ寄手の兵気虚実をさぐる程度に、小当りに当ってみましょう。策は、その上で』

と、陳登と同意見を述べた。穏当なりと認めたか、玄徳は、

『行け』

と、関羽にゆるした。

関羽は、手勢三千を率して城外へ打って出た。折ふし、十月の空は灰いろに閉じて、鵞毛のような雪が紛々と天地に舞っていた。

城を離れた三千騎の兵馬は、雪を捲いて寄手王忠軍へ衝ッかけていた。

雪と馬、雪と戟、雪と兵、雪と旗、卍となって、早くも混戦になった。

『そこにあるは、王忠ではないか。なんで楯の陰ばかり好むぞ』

大青竜刀をひっさげながら、関羽は馬を乗りつけて、敵の中軍へ呼びかけた。

王忠も躍りあわせて、

『匹夫っ、降るなら、今のうちだぞ。わが中軍には、曹丞相あり。あの御旗が目に見えぬか』

と云った。

ふる雪に、牡丹のような口を開いて、関羽はからからと大笑した。

『曹操がおるなれば、なによりも望む相手。これへ出せ』

三

王忠は、唾して云い返した。

『かりにも、曹丞相ほどなお方が、汝ごとき下賤の蛮夫と、なんで戦いを交えようか。もう一度生れ直して来い』

『吐ざいたな。王忠』

関羽が馬を駆け寄せると、王忠も槍をひねって、突っかけてくる。関羽はよい程にあしらって、わざと逃げ出した。

『口ほどにもない奴』と、浅慮にも、王忠は図にのって関羽を追っかけた。

『口ほども無いか、有るか、鞍の半座を分けてつかわす。さあ王忠、こっちへ来い』

関羽は、青竜刀を左の手に持ち変えた。王忠は、あわてて馬の首をうしろへ向けた。が、早くも関羽の臂は彼の鎧の上小帯をつかみ、

『じたばたするな』

と、ばかり軽々小脇に引っ抱えて馳け出した。

潰乱する王忠軍を蹴ちらして、馬百匹、武器二十駄を分捕って、関羽の手勢はあざやかに引揚げた。

帰城すると、早速、関羽は王忠をしばりあげて、玄徳の前に献じた。

玄徳は王忠に向って、
『汝、何者なれば、詐って曹丞相の名を偽称したか』と、詰問した。
王忠は答えて、
『詐りは、われらの私心ではない。丞相がわれ等に命じて、御旗をさずけ、疑兵の計事をさせられたのである』と、有りの儘に云った。
そして、猶、
『不日、袁紹を破って、丞相がこれに来給えば、徐州ごときは、一日に踏みつぶして了われるであろう』と豪語を放った。
玄徳はどう考えたか、王忠の縄を解いて、
『君の言は、寔に、神妙である。事の成行きから、丞相のお怒りをうけ、征を受けて、やむなくこの徐州を守るものの、玄徳には曹操に敵対する意志はない。君もしばらく当城にあって、四囲の変化を待ち給え』と、彼を美室に入れて、衣服や酒を与えた。
王忠を奥に軟禁してしまうと、玄徳はまた近臣を一閣に集めて、
『誰ぞ、この次に、もうひとりの劉岱を、敵の陣から生捕って来る智者はないか』と、云った。
関羽は、雑談的に、
『やはり家兄のお心はそこにありましたか。実は、王忠と出会った時、よほど一戟の下に斬って捨てんかと思ったなれど、いやいや或は兄の御本心は、曹操と和せず戦わず――不戦不和――といったような微妙な方針を抱いておられるのではないかとふと考えつき、わざと手捕りにして持ち帰りましたが』と語って、自分の推測が中っていたか否かを、率直にたずねた。
すると、玄徳は、会心の笑をもらして、
『さなり、さなり！　不戦不和とは、よくわが意中の計を観た。さきに張飛がすすんで行こうと云ったのを止めたのも、張飛の躁がしい性質では、必ず王忠を殺して来るにちがいないと惧れたからである。王忠、劉岱のごとき輩を殺したところで、われには何の益もなく、かえって曹操の怒りを煽るのみであるし、もし、生かしておけば、曹操がわれに対する感情もいくらか緩和されてくるであろう』
そう聞くと、張飛はまた、前へ進み出て、玄徳に云った。
『わかりました。そう御意中を承われば、こんどは、此方が出向いて、必ず劉岱をひきずり参らん。どうか此方をおつかわし下さい』
『参るもよいが、王忠と劉岱とは、対手がちがうぞ』
『どう違いますか』
『劉岱は、むかし兗州の刺史であった頃、虎牢関の戦いで、董卓と戦い、董卓をさえ悩ましたほどの者である。決してかろんずる敵ではない。それさえ弁えておるならば行くがよい』

不戦不和

一

どうも煮えきらない玄徳の命令である。争気満々たる張飛には、それがもの足らなかった。

『劉岱が虎牢関でよく戦ったこと位は、此方とても存じている。さればとて、何程のことがあろう。即刻、馳向って、この張飛が、彼奴をひッ摑んでこれへ持ち来たって御覧に入れます』

『そちの勇は疑わぬが、そちの躁がしい性情をわしは危ぶむのだ。必ず心して参れよ』

玄徳の訓戒に、張飛は、むっと腹をたてて、

『躁がし躁がしと、まるで耳の中の虻か、懐中の蟹みたいに、この張飛をお叱りあるが、もし劉岱を殺して来たら、何とでも云うがいい。いくら兄貴でも主君でも、そう義弟をばかにするものじゃない』と、云いちらして、彼はぷんぷん怒りながら閣外へ出て行った。

そして、三千の兵を閲して、

『これから劉岱を生捕りに行くんだ。おれは関羽とちがって軍律は厳しいぞ』

と、兵卒にまで当りちらした。

張飛に引率されて行く兵は、敵よりも自分たちの大将に恐れをなした。――一方、寄手の劉岱も、張飛が攻めて来たと知って、ちぢみ上ったが、

『柵、塹壕、陣門をかたく守って、決して味方から打って出るな』と、戒めた。

短兵急に押しよせた張飛も、蓑虫のように出て来ない敵には手の下しようもなく、毎日、防寨の下へ行っては、

『木偶の棒っ。――糞ひり虫。――糞ひることも忘れたのだろ』と、士卒をけしかけて、悪口雑言をいわせたが、何と云われても、敵は防禦の中から首も出さなかった。

張飛は、持前の短気から、業を煮やして来たとみえ、

『もうよそよそ。このうえは夜討だ。こよい二更の頃に、夜討をかけて、蛆虫どもを踏みつぶしてくれる。用意用意』と、声あらかに命じ、準備がととのうと、

『元気をつけておけ』と、昼のうちから士卒に酒を振舞い、彼自身も、したたか呑んだ。

『景気のいい大将』と、兵隊たちも、酒を呑んでいるうちは、張飛を礼讃していたが、そのうちに、何か気に喰わない事があったのか、張飛は、咎もないひとりの士卒を、さんざんに打擲したあげく、

『晩の門出に、軍旗の血祭りに具えてくれる。あれに見える大

木の上に縛り上げておけ』

と、云いつけた。

士卒は、泣き叫んで、掌を合わせたがゆるさない。高手小手にいましめられて、大木のうえに、生き磔刑とされてしまった。

夕方になると、たくさんな鴉がその木に群れて来た。張飛に打ちたたかれて、肉もやぶれ皮も紫いろになっている士卒は、もう死骸に見えるのか、鴉はその顔にとまって、羽ばたきしたり、嘴で眼を突ッついたり、五体も見えないほど真黒にたかって躁いだ。

『ひイっ……畜生っ』

悲鳴をあげると、鴉はぱっと逃げた。ぐったり、首を垂れていると、また集まってくる。

『――助けてくれっ』

士卒はさけび続けていた。

すると、夕闇を這って、仲間のひとりが、木に登って来た。何か、彼の耳元にささやいてから、縄目を切ってくれた。

『畜生、この恨みをはらさずにおくものか』

半死半生の目に会った士卒も、その友を助けた士卒も、抱き合って、恨めしげに張飛の陣地を振向き、闇にまぎれて何処ともなく脱走してしまった。

二

陣営のうちで、張飛はまだ酒をのみつづけていた。

そこへ卒の一伍長が、あわただしく馳け込んで来て、

『見張の者の怠りから大失態を演じました。申しわけもございません』

と、懲罰に処した樹上の士卒が、いつの間にか逃走した由を、平蜘蛛のようになって慄えながら告げた。

『知っとる知っとる。将として、それくらいな事、知らんでどうする。……あははは、それでいいのだ』

彼は、大杯を挙げて、自ら祝すように飲み干し、幕営を出て、星を仰いだ。

『そろそろ二更の頃だな。――わが三千の兵は三分して各自の行動に移れ。――その一は、間道をしのび、その二は、山を越え、その一は、止まって敵の前面へ向う』

張飛の命令が伝わると、やがて夜靄のなかに、まず二千の兵が先に、どこかへうごいて行った。

それは、敵の防寨の背後へまわって忍ぶ潜兵らしかった。

『まだちと早い。もう一杯飲んでからでいい』

張飛は、残る三分の一の兵をそこに止めて、なお一刻ほど、酒壺を離さず、時折、星の移行を測っていた。

その宵。

劉岱の防寨の方では、早くも、今夜敵の張飛が夜討をかけてくるということを知って、ひどく緊張していた。

『あわてるな。敵の脱走兵の訴えとて、滅多に信じるとは危険だ。おれ自身、その兵を取調べてみよう。ここへ其奴を引ッ張って来い』

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com